

南葵音楽文庫閲覧室 利用ガイド

よみがえる 「南葵音楽図書館」

このたび、南葵音楽文庫閲覧室に設置した本や楽譜を大幅に入れ替えました。貴重書庫に収められていた多数の資料を閲覧室に移し、1世紀前、南葵文庫の建物にあった「南葵音楽図書館」閲覧室の再現を図りました。直接書物や楽譜を手にとり、頼貞の直筆サイン等を眼で確かめれば、蒐集にかけた頼貞の熱意、音楽図書館に託した理想を感じられるでしょう。



▲作曲家全集楽譜の入れ替え作業中
(2021年8月撮影)

古典的な音楽書が、ここでは
刊行当時の背革の装幀で並んでいます。

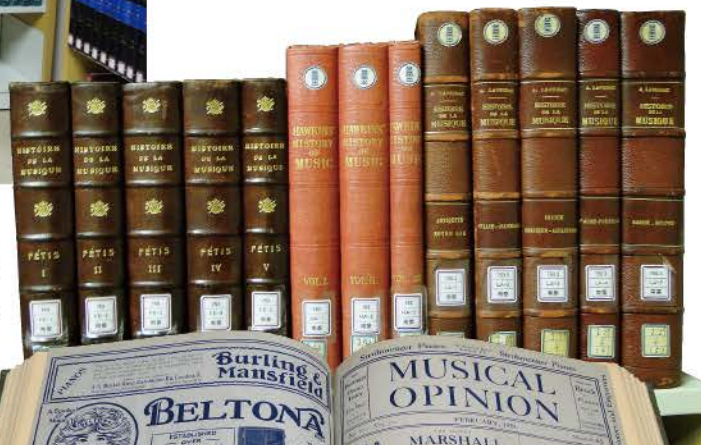
▼南葵音楽文庫閲覧室入口
手前は関連資料展示ケース



館長徳川頼貞の熱意と理想



▲徳川頼貞 南葵音楽図書館設立(1925年)時の写真



ページを開けば蓄音機、ピアノなどの広告が…
1世紀前の音楽生活を彷彿とさせます。

音楽図書館の誕生

欧米を旅し、図書館の音楽部門の充実ぶりを目の当たりにした徳川頼貞は、音楽振興のためには音楽専門の図書館が必要だと痛感しました。南葵文庫の音楽部門としての資料蒐集を経て、頼貞の構想は、調査研究や著作出版の助成、演奏会や講演会の開催をふくむ「南葵音楽事業部」へと拡充、その中核をになう図書館は、事業部の設立に先立ち、旧南葵文庫の建物を利用して1924年10月2日から「南葵楽堂図書部」として、一般閲覧を開始しました。1925年10月、事業部設立にともなって「南葵音楽図書館」と改称されました。



▲南葵音楽図書館は旧南葵文庫の事務所棟を利用



▲南葵音楽図書館のカードボックス

Beethoven, Ludwig van, 1770-1827.
[Sonata, piano, no.23, op.57, F minor]
Sonata [reproduit en fac-simile le
manuscript original de la sonate appassionata
de Beethoven (en fa mineur, opus 57), qui
appartient à la Bibliothèque du Conservatoire
de Paris. New York, Beethoven Association,
cn.d.]
[40] p. 23 x 31 cm.

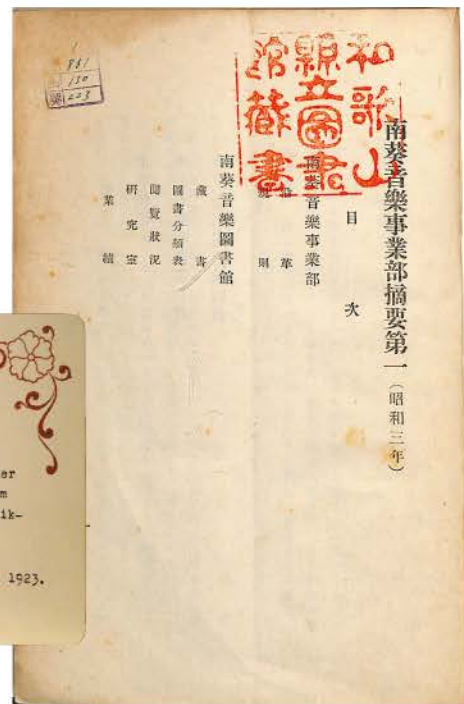
▲図書カードの例
ベートーヴェンの「月光」ファクシミリ版

閲覧者用カードは「著者名」「作曲者名」及び「分類」目録が作成され、閲覧室に備えられました。

1階の一室にはピアノを置き閲覧者の研究に供し、蓄音機室が3室あり、請求によってレコードを貸与していました。その他、館長室、掌書室、庶務室、研究室、書庫等あり、別棟には製本室の設備がありました。

欧米の図書館に匹敵する音楽資料を公開

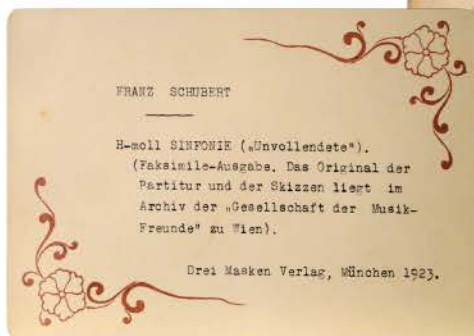
閲覧室には音楽に関する基本図書（音楽事典、音楽年鑑、音楽雑誌など）のほか語学辞書、百科事典等を備え、自由に閲覧できました。日本初の音楽専門図書館として、個人購入が困難な全集楽譜、定期刊行物、記念出版を始め、古典的な文献や初版本、原稿等の蒐集、公開しました。



▲『南葵音楽事業部摘要第一』(1929年)
図書館の目的、現況を紹介

頼貞の理想、 今ここ和歌山で

このたび貴重書庫に収められていた資料の多くを閲覧室に移し、1世紀前、南葵文庫の建物にあった「南葵音楽図書館」閲覧室の再現をはかりました。スペースゆえ全貌再現とはいえませんが、重厚な装幀、貴重な初版、日本唯一の所蔵本、頼貞直筆サインが残る楽譜・・・実際に手にとり、資料にふれ、ページを繰り、書物の古色やずっしりとした重みなどから、南葵音楽図書館の時代と、音楽貢献に捧げた頼貞の熱意を感じてみてください。



▲オリジナルのカード
シューベルト：交響曲「未完成」の
ファクシミリ版

南葵音楽文庫アカデミー

【令和4年春】開講時間はすべて13:30~15:30

※講師、申込方法等の詳細はWEBをご覧ください。→



2/19(土) 新宮市文化複合施設 (丹鶴ホール)

泉 健「東くめの生きた時代と南葵音楽文庫」
小山 豊城「紀州藩付家老水野忠央の文化政策」

2/20(日) 和歌山県立図書館 (本館) 講義研修室

栗林あかね「カサド・原コレクション×ホルマン文庫：演奏家の資料と活用」
小山 豊城「紀伊徳川家の文化政策」

南葵音楽文庫 閲覧室を利用するには

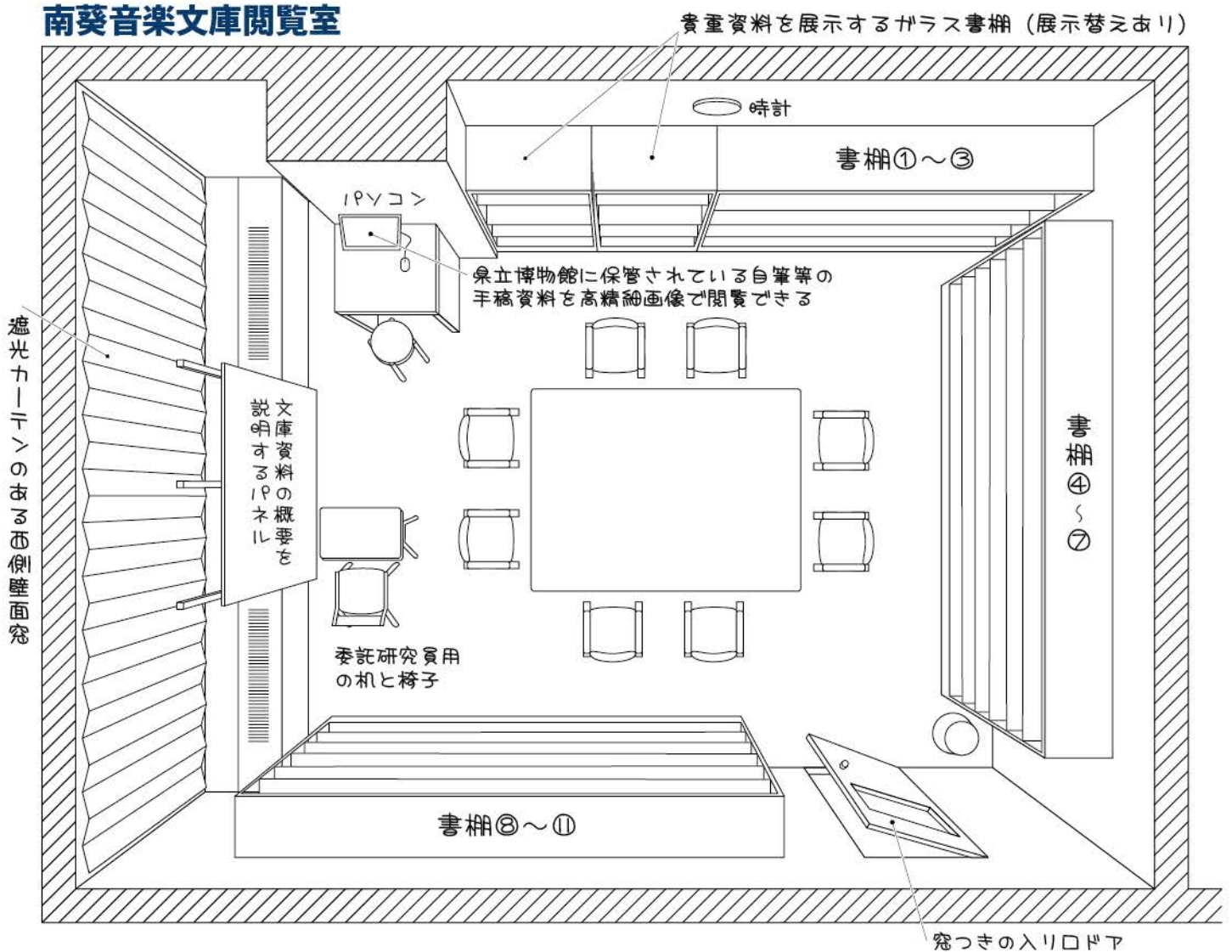
入室方法 カウンターで申込用紙に記入してください。

筆記道具 鉛筆以外の使用はご遠慮ください。

開室時間 図書館の開館時間に準じます。閉館日などの詳細はwebでご確認下さい。



南葵音楽文庫閲覧室



初めて訪れる方に…

「旧収蔵」と「新収蔵」

南葵音楽文庫（2万点余）には、徳川頼貞自身により、また彼の主導により蒐集され、1925年設立の南葵音楽図書館に収められていた「旧収蔵」と、頼貞没後の1970年前後に追加購入された「新収蔵」という2つの資料群があります。

「貴重資料」と「重要資料」

1970年、それまでの調査をふまえて、特に貴重な資料を選定し、『蔵書目録 貴重資料』が刊行されました。ここには808点が掲載されています。「貴重資料」の目録には収められていない資料のなかから、新たに定めた基準で重要な資料を選定し、「重要資料」として和歌山県へ寄託後、毎年発表しています。

図書館と博物館

「旧収蔵」（1万点弱）のうち、自筆楽譜などの手稿約100点は和歌山県立博物館が、他の印刷本等は和歌山県立図書館が保管しています。「新収蔵」はすべて図書館が保管しています。

閲覧室に並ぶ「旧収蔵」

南葵音楽文庫閲覧室には、「旧収蔵」のうち、点数からすれば約2割の書籍、楽譜が配架されています。「旧収蔵」の残りの部分と「新収蔵」は、書庫に収められています。印刷本の「貴重資料」は、閲覧室内のガラス書棚に展示される場合をのぞき、書庫で保管されています。



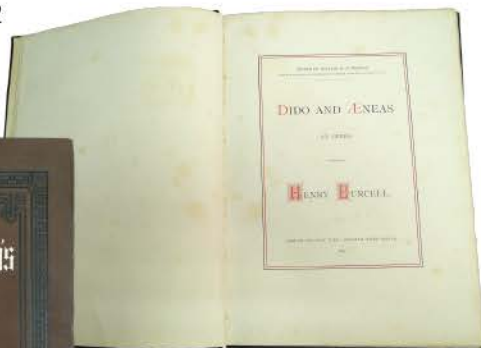


バッハ、ヘンデル、モーツァルト、パーセル…豪華で重厚な大作曲家の全集楽譜オリジナル 【書棚①～③】

南葵音楽図書館は、唯一の専門図書館として、音楽研究に不可欠で、個人で揃えるのは困難な音楽書や楽譜を積極的に蒐集しました。その柱のひとつが作曲家の全集楽譜や、国ごとの歴史的な音楽遺産をまとめた楽譜シリーズです。

閲覧室には、南葵音楽図書館旧蔵のバッハ、ヘンデル、モーツァルト、パーセル、シューベルト、パレストリーナ全集を設置しています。19世紀後半から刊行が始まった全集楽譜オリジナル所蔵は南葵音楽文庫ならではの、豪華で重厚な造本、装幀を実際に手にとって見るすることができます。所蔵リストは『南葵音楽文庫案内』p.82にあります。

▼バッハ全集の装幀



▲パーセル全集より《ディドとエネアス》
校訂：W.H. カミングス



▲ヘンデル全集の背文字
第45巻が《メサイア》



音楽事典、人名事典、百科事典。音楽雑誌、専門研究誌、音楽協会の機関誌。音楽会プログラム。ヨーロッパの図書館や文書館の音楽資料所蔵目録、音楽資料や楽器コレクションの目録、作品目録… 【書棚④～⑦】

専門図書館として、一般には流通しない専門誌、目録類の蒐集に力を注ぎました。演奏会そのものが少ない100年前の日本で、欧米演奏会のプログラム冊子の充実ぶりに刺激を受けていた様子も窺えます。



▲ブリタニカ百科事典（米国版）
南方熊楠顕彰館（田辺市）にも所蔵がある。



▲グローヴ音楽事典
版を重ねる毎に購入、頻用した跡がみえる。



▲ロンドン・ワーグナー協会の機関誌

◀ 鍵盤ハーブ
キンスキー編『W.ハイヤー音楽史博物館目録』（限定版、ケルン、1910年）より。



モーツァルト作品目録▶
（通称ケッヘル目録）
第2版（1905年）



**『ニューグローヴ世界音楽大事典』
全21巻（講談社、1993～95年）**

【書棚③】

The New Grove Dictionary of Music and Musicians (1980年)の日本語訳。日本版のための追加項目もあり、日本語で読める最大の音楽事典を揃えています。県下の公共図書館では唯一の所蔵ですので、広くご利用ください。



音楽書の古典的名著と資料集、オペラ楽譜、ミニチュア・スコア 【書棚⑧～⑪】

南葵音楽図書館は、最初の重要なバッハ伝であるフィリップ・シュピッタの『バッハ』、セイヤーの『ベートーヴェン』など古典的な名著が、また大音楽家の書簡集などの基本資料が揃えられていました。特にベートーヴェン関係の文献蒐集に注力、所蔵するベートーヴェンの自筆書簡（下書き）の調査研究に使われた文献もここに並べられています。また、ベルリンでドイツの音楽研究家マックス・フリートレンダーから譲られた貴重な文献もあります。

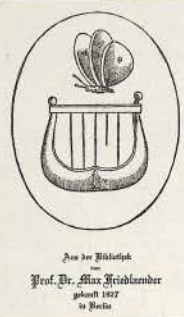


▲セイヤー『ベートーヴェン』などの書棚

◀フリートレンダー受贈本の蔵書票

▼『バルジファル』への書き込み

徳川頼貞は、永井荷風に次いで早くから欧米各地でオペラを見た人物のひとりでした。留学前は弟とともにオペレッタを楽しんでもいました。その時期から、単に鑑賞するばかりでなく楽譜を購入し作品を深く知ろうと務めました。各地でオペラを観るごとに楽譜を購入、日付や署名を残しています。書棚⑩にあるオペラの楽譜には頼貞の署名等が残され、自著には書かれていないオペラ遍歴も窺えます。



▲ミニチュア・スコアの書棚

書棚⑩には南葵音楽文庫が所蔵するミニチュア・スコアの8割程度が並べられています。ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、スクリアピン、シェーンベルク等々、当時としては新しい傾向の作品が含まれています。スナール社から出版されたオネゲル作品、頼貞が学習用に用いたベートーヴェン「第九」交響曲のスコアもあります。

*配架書棚は変更する場合があります。

リコルディ版「第九」▶
(ジョルダーノ式記譜)



◀「カミングス文庫目録」



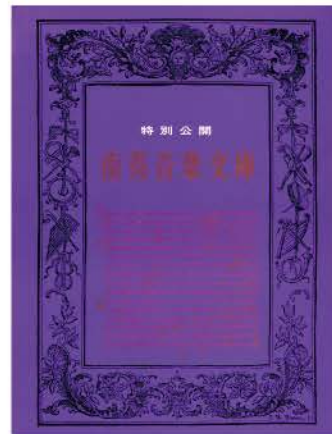
▶「頼貞随想」

南葵文庫/南葵音楽図書館発行の文献、頼貞著作、特別公開図録、目録 【書棚⑧】

南葵文庫で開催された展示会の目録等。『カミングス文庫目録』など南葵音楽図書館による出版物は、和歌山県立図書館の蔵書も合わせて設置しています。

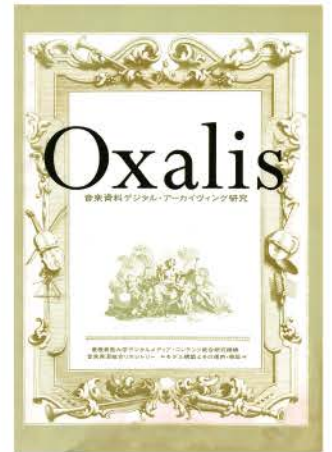
徳川頼貞の著作は『薈庭楽話』（市販版：1943年、私家版による新版：2021年）、『頼貞随想』（非売品、1956年）。

戦後はじめて公開された展示会の図録（1967年）、1977年まで東京・駒場の日本近代文学館で仮公開された時期に刊行された目録類が備えられています。



▲図録「特別公開—南葵音楽文庫」

調査報告書『Oxalis』▶



慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構のプロジェクトとして調査等が行われた際に刊行された報告書『Oxalis』

1～3（2007～2009年、非売品）。

和歌山県への寄託以降に刊行された『南葵音楽文庫紀要』、紀州徳川400年にあわせて刊行された3冊（『南葵音楽文庫案内』『薈庭楽話』『徳川頼貞侯の横顔』いずれも中央公論新社、2021年）を備えています。

南葵音楽文庫の成り立ち

名称の変遷

南葵文庫音楽部

南葵楽堂図書部

南葵音楽図書館

ホルマン文庫の受入れ

小山作之助の所蔵資料受入れ

フリートレンダーの蔵書の一部を受入れ

頼貞が欧米滞在中に購入

カミングス文庫の購入

欧米への発注を本格化

教養・教育用の購入
紀州徳川家への寄贈

1915
(大正4)



南葵文庫
父・頼貞が自邸内に設置した私設図書館

1920
(大正9)



南葵楽堂
頼貞が設置した私設音楽堂
開館(1918)後、半地下の図書室で資料整理

南葵文庫閲覧室
音楽資料の閲覧は1920年10月に開始



関東大震災(1923)

1925
(大正14)

旧南葵文庫事務所
大震災後の音楽資料公開に使用された



1930
(昭和5)



南葵音楽図書館閉館(1932)

慶應義塾大学図書館
南葵音楽図書館の閉館にともない、所蔵資料の寄託を受け、公開(1933~1945)

1967
(昭和42)



南葵音楽文庫一特別公開展
大阪会場開会式(1967年4月18日)
天満橋松阪屋7階ホール

仮公開(日本近代文学館、1970~1977)

2017
(平成29)



南葵音楽文庫プレオープン
和歌山県立図書館(2017年12月3日)

2021
(令和3)



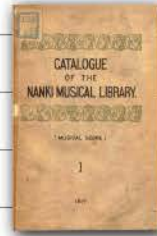
『南葵音楽文庫案内』(2021)
中央公論新社
本文96ページ



『菅庭楽話』(2021)
中央公論新社
本文384ページ



『徳川頼貞侯の横顔』(2021)
中央公論新社
本文204ページ



楽譜の目録I(1917)
本文36ページ



楽譜の目録II(1920)
本文104ページ



『カミングス文庫目録』(1925)
本文70ページ



『南葵音楽図書館目録I(音楽学)』
(1929) 本文372ページ

※背景のグリーンで示したグラフの幅は、「旧収蔵」資料の増加の推移を表しています。